

短歌からみた人見絹枝の人生 Kinue Hitomi's tanka and her life

三澤 光 男

Mitsuo MISAWA

Abstract

In our former study(vol.31) we made clear the relation of Kinue Hitomi's athletic activities to the tanka which she composed at times in her 24 year life.

Her tanka we analyzed there, all that we had found, were 62 pieces; now we have 75 more.

So in this supplementary study, analyzing 137 pieces in all, we make clear the relation between her tanka and her life again.

The result of this study we can summarize as follow:

- 1) We do not find any pieces which she may have composed in the year 1927-29, as we did not before.
- 2) 22pieces she composed on the dying bed in 1931, were her swan songs with joy and sorrow of her whole life not only compressed but also sublimated.

keywords: Kinue Hitomi, life, Tanka (Japanese poem of 31 syllables)

I. はじめに

2008年8月8日に北京五輪大会は開幕し、日本代表選手団の男子では水泳の金メダル(100・200m平泳)北島康介選手と、女子ではソフトボール・チームの金メダル獲得が光った。

翻って筆者が体験してきた陸上競技の成績は低調で、女子マラソンに入賞者はなく、男子ハンマー投も健闘の域(3位)に止まった。前回のアテネ大会(2004)の活躍に遠く及ばなかったといえる。しかし成績不振の日本陸上選手団の中であって、男子400m継走が銅メダルに輝いたことは、高く評価されるべきであろう(大会第15日・8月22日)。日本のTV・新聞等は日本陸上男子トラック競技では初のメダル獲得、男女を通じ短距離種目での初メダルの快挙と報じた。さらに加えて、日本陸上競技のトラック種目では、人見絹枝(800m・2着)以来の快挙と紹介していた。人見絹枝研究に関わる筆者には、人見絹枝の功績の偉大さを、改めて日本国民に知らせてくれた嬉しいニュースの日でもあった。

II. 研究の目的

2001年に筆者は「競技者人見絹枝の短歌歴」と題し、研究発表を行った。世界のトップ・アスリートとなった人見は、非凡な文才の持ち主であった。このことは岡山高女卒業後の進路を文科系の上級校と考えていたことにも符合する。本研究は女性スポーツが国際的にも黎明期にあった1910～1920年代に、その地位向上に如何に苦勞・開拓・尽力してきたかを、短歌を通し迫ろうとした試みであった。今回の発表も同目的の下に、先の発表後に発見された資料を加え、人見絹枝短歌研究の集大成を試みたものである。

III. 研究の方法

先の発表後に、人見が生地・岡山を離れて上京、二階堂体操塾生となる1924年の「日記」が発見された(2005年)。さらに人見絹枝生誕100年事業の展開に伴い、大阪毎日新聞の『社史』が公開された。ここにも同社員小笠原敦子による短歌の紹介がなされている。さらに絹枝の学友の遺族による資料提供もあり、本研究はこれらの新資料を加え編集したものである。掲出に当たっては、できるだけ初出によったが、表記上の

誤りは訂正した。[]内は校訂の補注。

IV. 研究の結果

福浜小学校6年生のとき、人見に短歌の手ほどきをした教諭岡崎静子は、其の秀でた才能を予見している。本研究は人見が岡山高女から二階堂体操塾に進み、大阪毎日新聞社員として活躍し、24才（1904～1931）で終わった生涯において詠んだ短歌を暦年順に収録したものである。なお今回は先の発表では触れることの少なかった「京都市立第一高女教員時代」を加えることが出来た。また作成時期不明のもの2首も記載した。

1. 岡山高女時代（1920～1923年）

人見の生家は、岡山県の三大河川に数えられる旭川に近く、また海が近くまで打ち寄せる水田地帯にあった。高女までの通学は約8kmの行程であった。

a. 1920年（高女1年生）

人見がテニスを始めた当年の作品は見出せなかった。

b. 1921年（高女2年生）

1. 牛追ひて我家にいそぐ童の口笛響く里の夕暮
うしお わがや わらんべ くちふえひび さと ゆふぐれ
さおも のち つりびと かた なが ゆふぐれ
2. 竿持ちて野路かへりゆく釣人の肩に流るる夕暮の色
いろ
3. 人買ひのくるとて母に聞かされし幼きころの恋しかりけり
ひと か はは き おきな こひ

c. 1922年（高女3年生）

1. 風船のふくるるを見て喜びしいとけなき日の祭こひしも
ふうせん ふくるる み よろこ ひ
まつり
2. 口笛をすさめばさびしいとしなる我がこの小犬よりそひにけり
くちふえ わが こいぬ
あか み
3. 草深き道のかたへの辻堂の小さきあかしをなつかしみ見る
くさふか みち つじどう ちい
か
4. 小夜ふけて田舎の道をただ一人たどれば淋し蟲の音のして
さよ ふか ぬ なか みち しひとり さび むし
ね
5. ま向ひの青田の上のクモの糸の朝のさ霧に白く見ゆるも
むか あをた うへ いと あさ ぎり しろ
み
6. 旅にある友なつかしみ床ぬちに淋しく聞けり秋雨の音を
たび ある とも ゆか さび き
さめ おと
7. 木犀のほのかにかをるこの宿をなつかしみたり
もくせい やど

あめ あした
雨の朝に

8. 緑こき竹の園生の幾千代と栄え行くこそうれしかりけれ
みどり たけ そのふ いくちよ さか ゆ
か
9. 今日もまた同じ思ひにすごせりと眺むる遠き夕ぐれの雲
けふ もまた おなじ おもひにすごせりと なが とほ ゆふ
ぐれ の雲
10. 午后の陽の照れるコートに我が打てるボールの音の高きうれしき
ごご ひ て
おと たか
音の高きうれしき

d. 1923年（高女4年生）

1. 暖かき冬日あびつつ祖母君とこの裏畑に大根ぬくなり
あたか ふゆび そぼぎみ うらはた だいこん
くなり
2. 去年よりはみのりよろしと父君のゑまし給へばそぞろうれしき
こぞ ちちぎみ たま
そぞろうれしき
3. 淋しさに一人かど邊に立ち居ればもみする音の重くひびけり
さびし さびしひとり べ た お
おも おと
4. もみずりの音しみじみときき居ればいつしか青き月の光れり
つき ひか おとたか
さむ しず
5. 子供等の氷をわれる音高くひびきて寒き静かなる朝
こどもら こほり おとたか
あさ ふゆ
6. 城下の寒き入江に水鳥の遊びてありき冬のひるすぎ
しろした さむ いるえ みづとり あそ
ふゆ
7. 空虚なるこの一日をうらみつつかどべに立ちて遠き空見る
うつろ いちにち た
とほ そらみ
ゆふ
8. 夕せまるこの村里に豆腐屋のかね淋しくもひびききこゆる
ゆふ むらさと どうふ や さび
ききこゆる
9. こごりたる裏路いそぐ駒下駄の冷たき足音きく冬の夜
ふゆ よ
ゆふ
10. 夕せまるこの山里に野火はもえけむりのあはく流れたるかも
なが
く さ や ほそ けむり
な
11. 枯草焼ける細き煙のきはだちて流れてありきこの夕やみに
ゆふ
12. 病みをれば又も寝覚の枕邊に薬をたける音のきこゆる
や また ねざめ まくらべ ぐすり おと
こゆる
13. 冬去ればもみがらの上にはつはつの芍薬の芽の赤く見えそむ
ふゆ さ うへ
あか み
14. 我が命刻むが如くすすみ行く時計の針を淋しく見つむ
わ いのちきざ こと ゆ とけい はり さび
み
15. 夕闇のとぎせる中に一人出て蛙なく音をしみじみときく
ゆふやみ なか ひとり で かはず ね
みときく
16. 風渡る雑木林にふみ入れば枯葉の嗅み身にせまり来る
かぜわた らふきばやし い かれ は にほ み
くる
17. 行ひて後に悔ゆるをうらみつゝ又行ひて悔ゆる淋しき
おこな のち く またおこな く
さび
18. 雨ぐものひくくたれたる竹藪に鳥なく聲のかそ
あま たかやぶ とり こえ

- けくもする
 19. 淋しさに雑木林にふみ入れば我足音のおそろしくする
 20. きり籠めし杉の林に今日も亦名もなき鳥のなく淋しさよ
 21. いさかひし後のさびしさしみじみと旅寝の床に我をうらむも
 22. 苦しさにえたえんとこそねがいつつ又しもなげくかよわき心

以上は『花橋』掲載の短歌であり、他に『人見絹枝日記』に

23. 今日も又同じ思にすごせしと淋しくのぞむ遠き夕雲
 24. 草枯れて広く忘たるこの原に牛のさけびの淋しくひびく
 25. いかにせん恋する人の心にもわれ別れ行く人の心よ
 がある。

2. 二階堂体操塾時代 (1924年)

高女時代に続き牧歌調の歌が多く詠まれている

- 汗流す苦しみを得て今日も又林流れし風にひたるも
- 夜半すぎて前の小路を涼しくもハーモニカーの流れ行くなり
- 夏の夜は一寝目さめてゆめ心地火事のかねをば聞く心地かな
- 友と友よりてつどひて帰り行く日をばかぞへてよろこびにけり
- のこる日を幾度ならずゆび折りて小供心によるこぶ我は
- 帰省する楽しみしのび今日も又苦しみのび暮し行くなり
- 今日も又かくする事をくひつつもふみ行く事をかへすすべなし
- 友達と多くつどひて暮らしなばかく苦しむと思ふ淋しさ
- 小雨ふるこの宵近く窓際によりてふる里こふるころなり
- いたづらな神の仕業にさそはれし友の身をば気づかひ見たり
- 愛すれば愛する程に苦しみの身をこがし行く世の中のみ

- 愛もなき人のよすがはやみなりと人は云ひけりその昔には
- 友なやむ心しらねどひたすらになぐさめて見し幼き我は
- 姉やめば今日もまくらべはなれ得で淋しくねがほ見る悲しさよ

以上は『人見絹枝日記』掲載の短歌であり、他に

- 宿の庭月の光に美しく泉水の鯉高く飛びたりがある。同級生に送った封書にみられた。

1～6は6月24日、7～12は6月25日、13～14は7月7日の日記欄に書かれている。なおこれより先の6月9日には「夜は久し振りに和歌を作る。やっと五十になる」翌10日「夜は和歌を作る」とあり、歌作を通した自己表現の高揚期にあったといえる。

3. 京都市立第一高女教員時代 (1925年)

「[人見先生は] 全校生徒の憧れの的でした…… [私は] 当時は最高級とされた『カンガルー製』の特別注文の [先生の] スパイクを持たせて貰った…… [私は] 5月の市記念運動会でリレーメンバーの一員として優勝し、餅菓子50個で祝勝会をしていただきました」[「これは、私が」先生が絹地のリボンを持っていくと [先生が] 書いて下さったもので、印判を押して下さった……] 今も表装して大事にしているという短歌—

・穴に入り袋に入りてかくれんと甘にならん頃は思ひぬ

4. 二階堂体操塾研究生時代 (1925年)

京都での教員生活から、校長二階堂トクヨに請われ、母校に戻った年の短歌である。

・相見ての言葉交わさぬ君なれどいとつかしく我は慕へり

『最新女子陸上競技法』より

因みにランラン (S. Langlan) は1920年にウィンブルドン庭球選手権大会で女子ダブルスと混合ダブルスを制した最初の女性 (仏) であり、ハバード (D.H. Hubbard) は、第8回パリオリンピック大会走幅跳優勝者 (米) である。人見の得意としたスポーツ種目の傑人への、賞賛と憧憬の作と考える。

5. 大阪毎日新聞社員時代 (1926年～1931年)

a. 1926年 第2回国際女子競技大会 (イェテボリ市) へ遠征した時の歌である。

1. 君のゆく欧路の旅に幸あれと我は祈れり今日の別れに
2. シベリヤの広野の旅に睦びたるえにしも深き思ひ出ならん
3. へだてども国にいませる師の君のみことばうけて今日はいさめり
4. ただ一人異郷にあればことさらに身にしみにけり師の御言葉は
5. 曇りては雨もようほしけり昨日今日秋のみ空のあわただしさは
6. 曇りては雨を催す北欧のみ空も同じ秋のはじめは
7. いつとなく秋は来にけり森の木のおちこち赤くもみじする見ゆ
8. さわがしき秋の一日もすぎゆけばそぞろしのびぬ国の事ども
9. 夜ふけてベッドにふせり涙しぬ国の母等しのびてあれば
10. あすも晴練習するに幸あれと空のぞき見ぬ床に入る前
11. 今日もまた土の香りにひたりつつ一日まなべりこのグラウンドに
12. 昨日よりすこしすすみし記録にもよろこびにみつ今の我はも
13. 我いこふ芝のひやけさしみじみと今日の別れをうばひ行くなり
14. 美しく手入れされた芝草にひとりぬき出しタンポポの花
15. 戦ひのあと十日にもせまりたりトランプとりて占ひなどす

1～2は途中までの同行者今井謙次に送ったもの、3～5は『スパイクの跡』に、6～15は『9月22日付大阪毎日新聞』に掲載されたものである。いずれも大会開始前のものである。

b. 1927～1929年の作品は未発見である。

c. 1930年 もっとも多くの作品が残っている年度で、第3回国際女子競技大会 (プラーグ市) へ参加した年である。

1. 翠こき松の茂みに北陵の瓦に落ちる夕映えの赤き
2. 土の色も見せて波うつ高粱の畠のつづきつきる果てなし
3. 友よさらばいますこやかに旅立たん祈りて給へ吾がこの仕事を
4. キャバレーの興味も湧かず床に入るわが心はも老ひしとぞ思ふ
5. キャバレーを見ると興ずる少女等と別れ床に入りたりハルビンの夜
6. 産近き故郷の姉の身を思ひ今夜も久しくねむれざりけり
7. ねもやらぬ旅の疲れの床中に産近き姉をいろいろと思ふ
8. お花畠汽車とまりてわがボーイ花つみて来し少女のために
9. わがボーイ摘みてもて来し百千草ヤカンに指して部屋に飾れり
10. 忽然とまこと忽然とわき立ちし大夕立のシベリヤを包む
11. 白樺や落葉松やトチ櫟みな一色に夕立の降る
12. 雷起りシベリヤの野は忽ちに物皆等しく打ぬらしたり
13. 雷起り大夕立のわき立ちてシベリヤの野を打ぬらしたり
14. 山も野も皆一色に打ぬらしいずくともなく雨走りて行き
15. うす暗く大夕立に打けぶるさなかに見ゆる白樺のあはれ
16. シンシンと頭の重く痛みをりシベリヤの旅四日つゞきて
17. 恋も欲し金も欲しきや人の住むよすがさへなきシベリヤの野に
18. しのべどもなほしのべども恋したふ君の姿のへだちをるかな
19. 白菊の群れて咲きたりバイカルの空高くして白く光れり
20. いさかひて少女等を憎みて見もしたり長き旅路のつれづれの間に
21. 旅に出て早くも十日過ぎにけりシベリヤの旅いまだつきぬに
22. なんとなう淋しき日なり讚美歌を半時ばかり歌ひても見し
23. シベリヤの曠野もつきてモスクワに入れりその日は春日和して

24. ざわめきの都を去りて少女等といまぬぐわれし
ごとポーランドに入る
25. 小春日や白樺林つきはて、境界線の赤く光れり
26. 野に遊ぶ牛かふ子等ものどかなりポーランドの
空小春日にして
27. 長旅の疲れも見せて明日の朝ブラーグに入る心
をどれり

以上はブラーグ大会の開会前の作であり、以下（28～43）は大会後の日本への帰国時に「白山丸」船内での執筆である。船内での短歌は定形のリズムを崩し、口語と文語が同時に共存し、散文的となっている。

28. 人のアラが見えて次第に自分が淋しくなるアサ
マシヤアサマシヤ（10月19日）
29. コブラ見てあはれ何かと馬鹿もあり（10月20日）
〔あれは〕
30. 菩提樹は緑に、仏の顔は光もせで妙な心地の寺
詣で（10月20日）
- 29・30はコロポに上陸した時の作である。
31. 平和安心今日は何だか心が澄む 窓の外は波が
高い（10月21日）
32. 寝苦しいヒルネ、スマトラの山が見える鷹は放
たれて行った無事に島につけよ（10月24日）
- 31・32は船内生活での作である。
33. 印度洋をつききって来るには来たがここにも同
じヤシばかり（10月25日）
34. ゴム樹の茂みワニの住む、にごりの沼や不気味
な小川こらで一寸住む気はないか？（10月26日）
35. 又船出次の港は香港か故国に帰る胸がざわつく
よろこびか、かなしみか誰か判じておくんなさい
（10月27日）
36. 起きて寝て寝ては起きるがまださめよ頭はい
つも夢半ばシンガポールの暑気あたり（10月28日）
〔さめぬ〕
- 33～36はシンガポールに上陸しゴム園を見物した時
の作である。ブラーグ大会での日本選手団の活躍が、
故国では不評なことを知り、これに抗議の意をこめた
作とみる。
37. いよいよラストヘビー、神戸はどうしてこんな
に遠いのだらうナア（10月29日）
38. 近頃面白きこと一向なし、心もさらにさえず
ビールの味のみ生る（10月30日）
〔生きる〕
39. 香港は美しい、しかし不景気だ、廿円ファイ、
ジョウダン也（10月31日）
40. 船が逆立ちしそうな大嵐、航海中一番ひどい大
嵐にここまで来てブツ、かった。（11月1日）

41. 今日から冬仕度（11月2日）
42. 日本着物よし、サシミの味もよし、酒さらによ
し 日本は余程近くなった（11月3日）
43. お船も腹がへつたらしい左や右に大ゆすりこり
やたまらぬ（11月4日）
- 以上1～43は『ゴールに入る』が資料である。

d. 1931年 人見の畢生の大作『ゴールに入る』が2
月に出版された。しかし人見の人生は暗転。4月
11日からの入院生活となった。短歌1～16は入院
中・病床での作であり、17～22は絶筆と考える。

1. 見舞はれて人の去り行く夕暮はなかばかり
淋しきものか
2. わが友の我に興へしこのくすりうれしくのみて
早くなほらん
3. 夜来れば胸の病の一人に身にしみこみて今日も
はかなし
4. 幸福に思へるこの日は歌も出ず看護れる君に抱
かれて寝む
5. 熱去れと力をつけし友の聲我うれしくも目をと
ちて聞く
6. 今日もまた心行くまで甘えみん君呼ぶ我の心
のうれし
7. 紀の国に旅する者のうれしけれみかんの味の舌
にしみつ
8. 看病につかれて君のうたたねに愛しと手を取り
感謝するわれ
9. 久方に鏡に向ひ髪すけば病みてはかなし頬の
衰ゆ
10. 無心にもものいひたげないぢらしさ人形抱きて
ひとときすぎぬ
11. スポーツに我身くだけと思ひしも去年のこと
なり今は淋しも
12. なすだけの事みな終えしこの體今ややすまん
友とたのしく
13. かくばかりなぐさめられぬわが心歌うたひ
つ、ねむればうれし
14. ことさらに心とがりがりて腹立ちししみとれる友の気
もくまずして
15. 久方に訪づれし雨のうれしけれ心と和みてすみ
て静けし
16. 熱去りて病一きはいえぬらし気づかふ友の顔
のやさしも
- 『人見絹枝－生誕百年記念誌』中の油野利博稿

17. コロンボもスマトラもやしも思へば夢の種
18. 葉牡丹にやり水くる人もなし春やうやくに遠
のき行けば
19. 胸ひらき物語り合はん人もなしこの世あまりに
冷やかにして
20. 気違いのあばれてやまず五月雨十日
21. いくら勝たうと思っても敗かしてやる胸の蟲
22. 息も脈も熱も高しされどわが治療の意気さらに
高し
三澤光男『競技者人見絹枝の短歌歴』より

e. 歌作時期不明

1. 母君よ着ませこの衣粗なれども娘が送るこの縮
入れを
2. 布団から選手にふった脚を出し(秩父宮記念ス
ポーツ博物館に展示)
〔なった〕

V. 考 察

①1925年の短歌が少ないこと ②1927年～1929年の遺作が未発見であること ③1931年の作品内容について考えてみることにする。

1925年は人見が社会人としてスタートした年であり、初めに京都一女教員を経験し、その後は二階堂体操塾勤務となる。労務に追われともに時間的余裕に乏しく、歌作への心のゆとりが得られなかったと考える。しかし遺された2首の歌は、人見の将来を示唆するものとして対照的であり、興味深い。一首は教師となり、女子体育指導者としての作品であり、ふと生徒との年令差に触発され、女性にかえっての歌である。他の一首は、外に向けた人見自身のスポーツへの向上心、スポーツウーマンとしての強い競争意欲を示したものであり、強者への憧憬と尊敬を歌ったものとみる。

1927年は、イエテボリ大会から帰国した人見にと

り、日本に於ける女性スポーツの後進性を痛感し、その地位向上、普及・発展のため、雑誌への寄稿・執筆を開始し、各地巡回の講演会・講習会活動をスタートした年である。多忙の一年で歌作の時間はなかったと考える。また翌1928年はアムステルダム大会に出場し、好成績をあげたが、帰国後は競技界からの引退も考えた波瀾の年であった。大会での好成績(優勝)への期待は、人見に重圧を与えたが、帰国後の達成感、精神的な解放感は、自著『スパイクの跡』『ゴールに入る』等からも明らかである。しかしその後訪れてきたのは、精神的・肉体的な疲労を伴った虚脱感であった。「オリンピックが終わってかれこれ5ヶ月になります、まだ心のゆるみを取り戻すことができない」-1929年1月7日付大阪毎日新聞-と話している。しかし国際女子スポーツ連盟会長ミリア夫人からの手紙で翻意し、後継者の育成を主目的とし競技生活を続行することとした。1929年は競技力の面では人見が最高のパフォーマンスを示した年である。しかしようやく決心したプラグ大会出場も、後輩の指導・育成、そして同行する後輩チームの旅費の工面に追われ苦勞する年となった。「世界恐慌」の年と重なる不運にもあった。1930年は人見にとり、競技者生活最後の年となった。アムステルダム・オリンピック大会から帰国後の人見は、新聞記者としての活動を考えるようになって居り、同年1月10日の『大毎社報』に「運動場で走っている以外に、外国のどの選手もがやり得ない、世界の女子選手の面白い話やら面白い情景を是非とも書いて、走りっこの選手たると同時に新聞記者としての記事を大いに送りたいと思うのでございます」と述べている。この頃に『ゴールに入る』は書き始っていた。

1931年の作品は総て入院中に作られ、17～22は絶筆となり、中でも22は死去前日の8月1日のノートに走り書きとして遺されていた。

表1 人見絹枝の短歌歴

(平成21年4月)

所属	年度	短歌		競技生活			著作物 (単行本)
		作品数	特徴	参加種目	著名大会	結果	
岡山高女	大正10年 (1921)	3		テニス			
	大正11年 (1922)	10		↓	関西女学校 庭球大会	3回戦進出	
	大正12年 (1923)	25					
二階堂体塾	大正13年 (1924)	15			陸上競技		
京都一女 二階堂体塾	大正14年 (1925)	2	勝者への 憧憬と敬慕	↓			
大毎社員時代	大正15年 (1926)	15	無聊の旅		第2回 国際女子競技大会	個人最高得 点(会長賞)	・最新女子陸上競技法 (4月)
	昭和2年 (1927)	0					
	昭和3年 (1928)	0			第9回 アムステルダム オリンピック大会	800m 2着	
	昭和4年 (1929)	0					・スパイクの跡(5月) ・戦ふまで(11月)
	昭和5年 (1930)	43	無聊感から 厭世感へ		第3回 国際女子競技大会	走幅跳 1位	・ゴールに入る(2月) ・女子スポーツを語る (10月)
	昭和6年 (1931)	22	清澄感から 諦観へ				
不明	2						
計		137					5

Ⅵ. まとめ

1. 先回の発表(2001年)では、人見の歌作を62首としたが、今回は137首を数えることが出来た。今後も収集を続けたい。
2. 1927年から1929年までの作品がないのは、人見が異国の地で国際大会に出場した年か、その翌年にあたり、歌作への時間的余裕がなかった。又、大会参加後の精神的・肉体的な疲労、その後には襲った虚脱感等のためだと考える。
3. 1931年は人見短歌の頂点を示し、秀作が多いと考える。非日常性の異国の旅先で得た体験と、帰国後の入院生活、闘病生活の床で、生死の境をさまよいつつ作った短歌は、短かった人見絹枝の人生の喜び、悲しみが凝縮され、清涼感・諦観へ傾いて行く姿が心に残る。

参考文献

- 1) 人見絹枝 1929 スパイクの跡 一成社、東京
- 2) 人見絹枝 1931 ゴールに入る 一成社、東京
- 3) 三澤光男 2001 競技者人見絹枝の短歌歴、日本女子体育大学紀要31:13-20
- 4) 三澤光男 2008 人見絹枝日記の研究-1924年の人見-, 日本女子体育大学紀要38:59-68
- 5) 永嶋惇正編 2008 人見絹枝-生誕百年記念誌-, 日本女子体育大学、東京
- 6) 岡山県立岡山高等女学校編 1922-1924 花橋1922年7月号~1924年7月号 岡山県立岡山高等女学校、岡山市

(平成21年9月4日受付)
(平成21年12月16日受理)